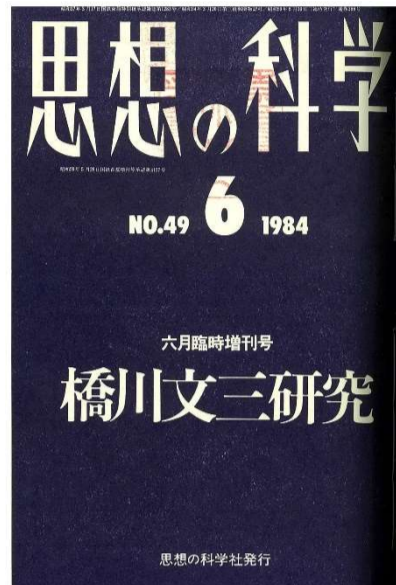
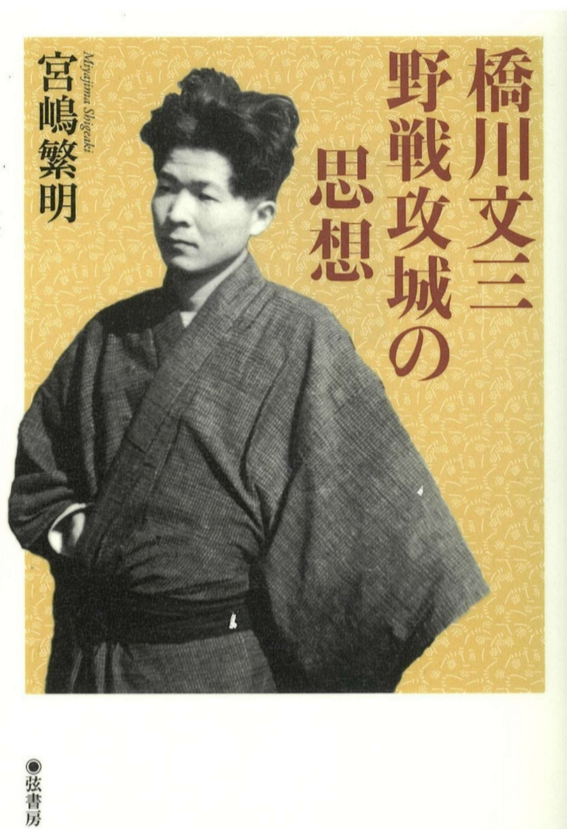


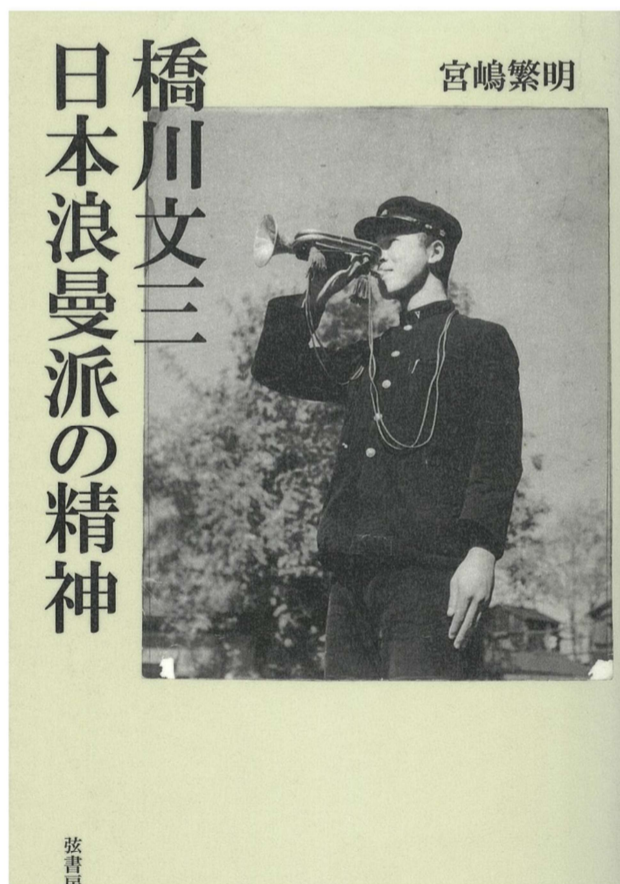
生誕百年橋川文三と橋川をめぐる人たち ～戦後思想史を俯瞰する



杉田俊介

橋川文三と
その浪漫

●弦書房



【対談】
中島岳志×杉田俊介
現在の息苦しさの向かう先を、
橋川文三の「戦後」から問う

【入門】
宮嶋繁明
橋川文三入門——その略歴と全体像

渡辺京二 猪瀬直樹
片山杜秀 田中純
畑中章宏 白井聡
水上文 早助よう子
赤井浩太 玉置文弥
高橋優香

橋川文三
社会の矛盾を撃つ思想
いま日本を考へる

中島岳志 杉田俊介 責任編集

於：奈良県立図書情報館3階ブリッジ

2022年12月13日～2023年1月29日

目 次

はじめに……………1

(解説) ……………2

(図書目録)

橋川文三……………18

保田与重郎……………22

丸山真男……………25

竹内好……………28

三島由紀夫……………30

後藤総一郎……………34

松本健一……………35

猪瀬直樹……………41

中島岳志……………43

はじめに

橋川文三（1922-1983）という思想家をご存じでしょうか。プラグマティズム哲学の鶴見俊輔（1922-2015）や、難解な著作で知られる吉本隆明（1924-2012）とほぼ同世代で、戦時中に思春期を送った戦中派に当たります。鶴見や吉本も今回取り上げる8人に負けず劣らず、橋川とは深い関係があり、この世代を考える場合、戦争との関わりは避けて通れませんが、3人の中で最も戦争にこだわったのが、橋川ではないでしょうか。

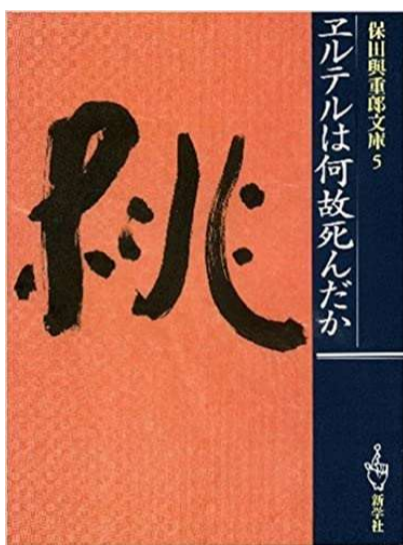
橋川が対馬で生まれたのは、1922年1月1日。生誕百年に当たる2022年には、橋川入門というべき『橋川文三：社会の矛盾を撃つ思想いま日本を考える』と、文芸評論家杉田俊介による、周辺思想家の思想内容まで深く立ち入って検討した『橋川文三とその浪漫』がともに河出書房新社より上梓されています。先立って門下生宮嶋繁明による浩瀚な評伝『橋川文三日本浪漫派の精神』『橋川文三野戦攻城の思想』（弦書房）があり、没直後には雑誌『思想の科学』による特集号もあります。

本展示では、こうした成果に学びつつ、橋川の著作及び橋川と、彼に影響を与え、または影響を受けた思想家すなわち、1 保田与重郎・2 丸山真男・3 竹内好・4 三島由紀夫・5 後藤総一郎・6 松本健一・7 猪瀬直樹・8 中島岳志の著作を取り上げます。彼らの橋川との関わりを示すことで、橋川思想の遍歴を浮き彫りにすると同時に、戦後思想史を橋川という角度から俯瞰、照射したいと思います。

なお、近年の傾向として、人名については常用漢字があっても、正字を使う傾向があり、「保田與重郎」「丸山眞男」といった表記が一般的です。但し、本展示では、常用漢字による表記が一般的だった時期が長く続いていたことに鑑み、地の文では、常用漢字を使用いたします。

1 愛読者から内在的批判の対象へ・保田与重郎(1910-1981)

奈良県桜井に生る。旧制大阪高等学校から東京帝国大学文学部に進み、在学時代から文学同人誌『コギト』を主宰し、亀井勝一郎らと 1935 年には『日本浪漫派』を組織する一方、『日本の橋』等、日本の古典を称揚する作品を次々に発表した。戦争が拡大していく中、その美文は戦中派のインテリ青少年に大きな影響を与えた。橋川や三島由紀夫もまたその一人である。橋川は次のように言う。

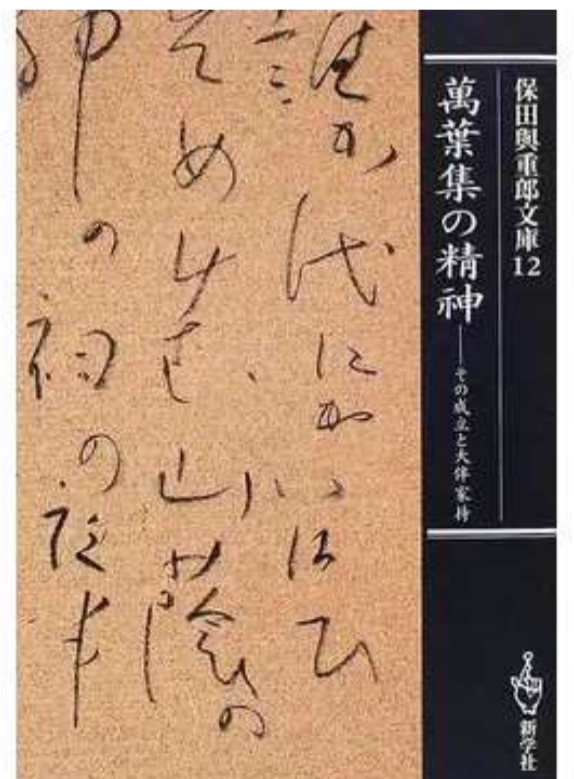


とにかく、昭和十五年から翌年にかけて保田の著作はほとんど全部よんでしまうほど熱心だった。とくに、そのころ渋谷の宮益坂の上にあった「ぐろりあそさえて」の書店で買ってきた『エルテルは何故死んだか』などは、もっともよく読んだものの一つであり、そのころとしては高価だった『万葉集の精神』などもひどく衝撃をうけた本である。

「ロマン派へ接近の頃」『橋川文三著作集』1巻 220頁

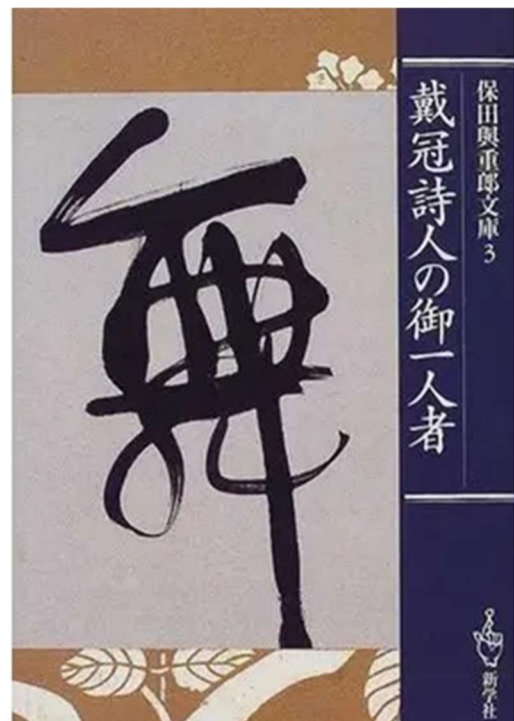
保田の戦争との関わりは、単に国策に便乗してこれを謳歌したものではなかったとはいえ、死地に赴こうとする青年を後押しする役割を果たしたことは間違いない。橋川の次の一節は、特に有名なものである。

事実、私たちと同年のある若者は、保田の説くことからの究極的様相を感じとり、古事記をいただいてただ南海のジャングルに腐らんした屍になることを熱望していた！ 少なくとも「純心な」青年の場合、保田のイロニイの帰結はそのような形をとったと思われる。これは甚しくナチズムの心理構造とはことなる形である。ナチズムは「我々は闘わねばなら



ぬ！」という呪われた無窮動にあらわれるが、しかし、私たちが感じとった日本ロマン派は、まさに「私たちは死なねばならぬ！」という以外のものではなかった。私がさきに「敗北の必然に対する予感的構想」を日本ロマン派に認めたく思ったのはそのためであった。

橋川『増補日本浪漫派批判序説』42頁



終戦によって、文壇の寵児保田は一転無視されるか、戦争協力者といった罵声が浴びせられる存在となり、1948年には公職追放となった。しかし、橋川は、保田に傾倒した戦時中の自分を克服すべく、後に『日本浪漫派批判序説』にまとめられる論考を1957年から雑誌に書きついでいった。

こうして私の日本ロマン派に対する関心は二重の構造を持つ。一つは、いうまでもなく、日本ロマン派という精神史的異常現象の对象的考察への関心であり、もう一つは、その体験の究明を通して、自己の精神史的

位置づけを求めたいという衝動である。この後者の関心は、いわば私の世代的関心ともいえるものである。

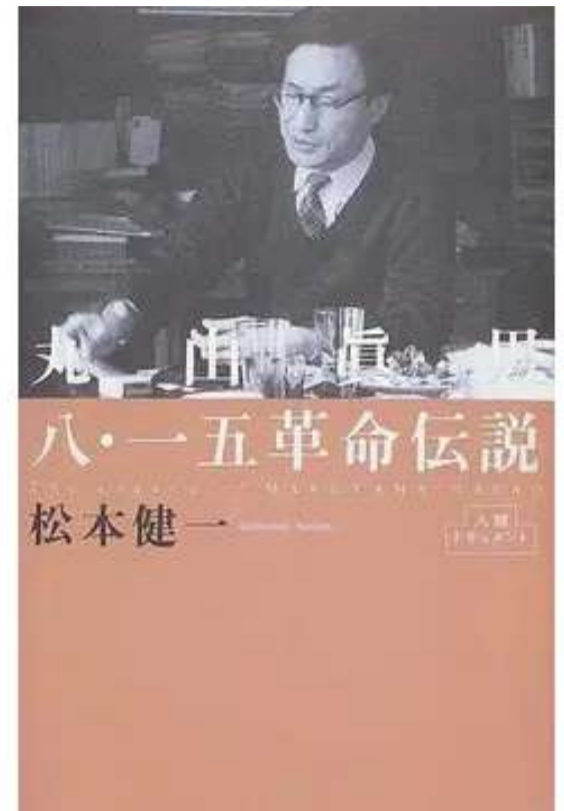
橋川『増補日本浪漫派批判序説』14頁



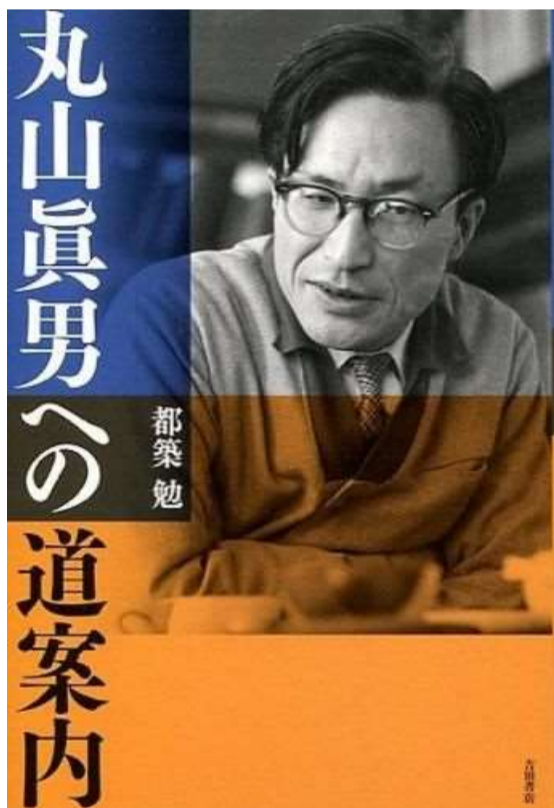
2 恩師にしてナショナリズム評価は逆ベクトル・

丸山真男 (1914-1996)

著名な新聞記者丸山幹治の子として大阪府に生る。1937年東京帝国大学法学部を卒業後すぐにその助手となり、助教授、教授と昇進。その間、2度の召集生活を体験し、広島で原爆にも被爆している。政治思想史を専門とし「丸山政治学」と呼びならわされる一方、終戦直後にはジャーナリスト的な媒体にも多数執筆している。



没後も講義録や座談集等の出版があいつぎ、「戦後民主主義のチャンピオン」として高い人気を誇



る。1960年代後半の全共闘学生との対立は著名だが、ロスジェネ世代からも「ひっぱたきたい」として名指しされる(赤木智弘『若者を見殺しにする国』双風舎、2007)ほどの存在感を示す。

丸山と橋川は、1949年頃執筆者と編集者という形で出会い、急速に関係を深めていく。橋川は1950年弘文堂へ入社し、1958年からは明治大学に奉職するがこれは、丸山及び門下生の斡旋によるものという。

当時、丸山真男先生からシュミットの初版本〔※『政治的ロマン主義』〕を借りていたためであり、それによって「日本浪漫派」批判の考えをかためた記憶がある。その『批判序説』は一九六〇年二月に本になった。今思えば戦後凡そ十五年をたどる私の回生の時期にほかならない。

橋川『歴史と人間』313頁

しかし、超国家主義に対するアプローチで、大きく方向性をたがえた。丸山は言う。

日本の「下から」のファシズム運動はついに最後まで少数の志士の運動におわり、甚しく観念的、空想的、無計画的であったこと、これが日本のファシズムの運動形態に見られる顕著な傾向であります。

『増補現代政治の思想と行動』62 頁



さらには、本来のインテリは戦争に批判的だったが、小工場主や学校教員、村役場員といった「亜インテリ」がファシズムの社会的基盤になったとするように突き放した見方をしている。

しかし橋川は、筑摩書房の現代日本思想大系の『超国家主義』を編むのに際し、丸山の規定に「若干の疑念」を呈して、彼らの言説を日本浪漫派と同様、内在的に理解分析しようとした。

テロリズムは、国家主義のみに結びつく行動ではなく、政治にのみ特有な現象でさえない。それは、人間存在のもっとも奥深い衝動とひろく結びついた行動であり、一般的にいえば、人間の生衝動そのものに根源的にねざした行動とさえいえるはずである。

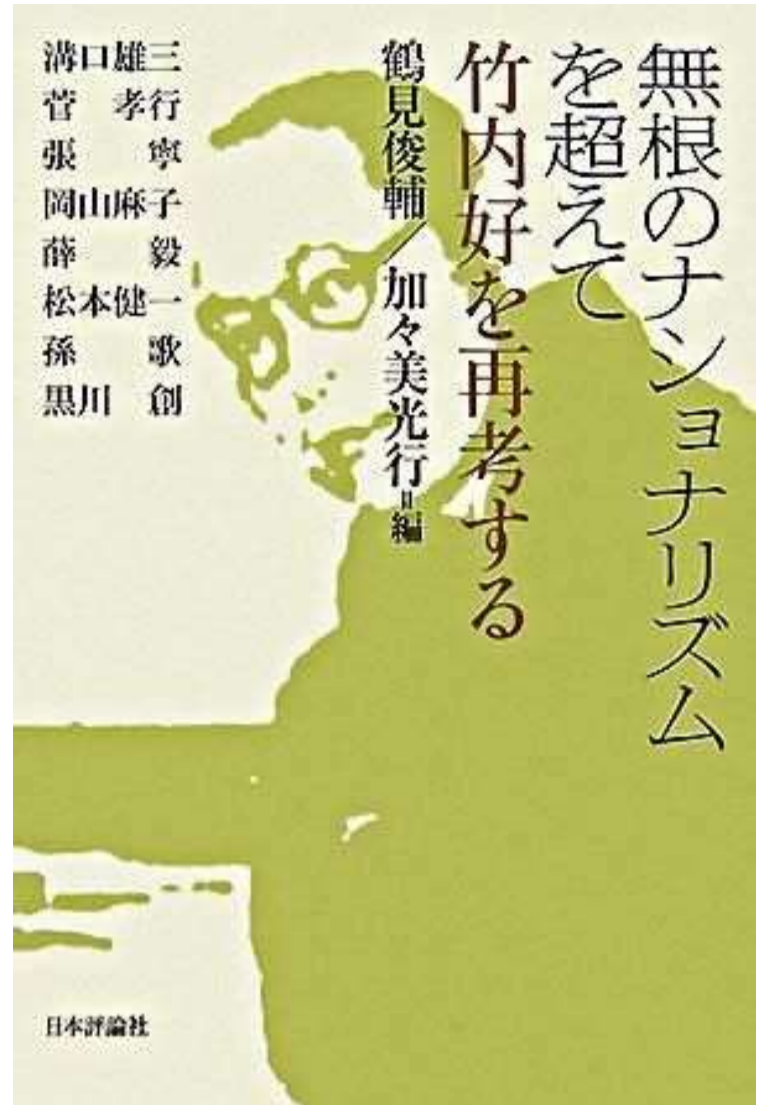
橋川編『超国家主義』10 頁



橋川はこうした視点を、ともに没後まとめられることになる『昭和維新試論』や『昭和ナショナリズムの諸相』等に収録される論考で深めていく。

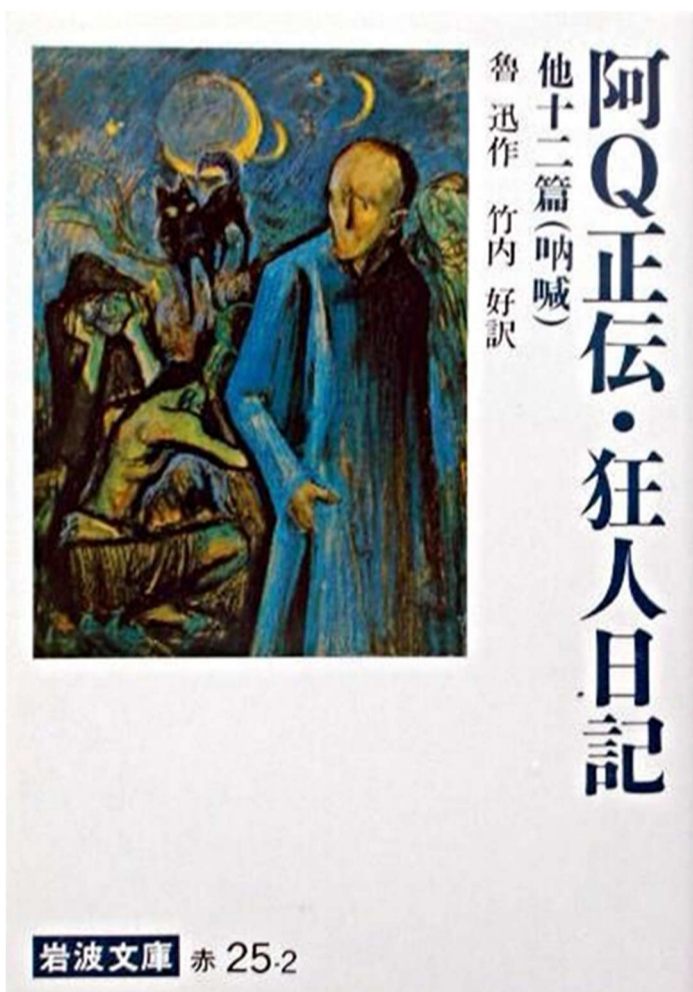
3 アジアへのいざない・竹内好(1910-1977)

長野県に生る。小学中学時代は東京で過ごす。旧制大阪高校へ進学し、保田与重郎の同級生となる。東京帝大文学部支那文学科に進み、大学在学中に武田泰淳らと「中国文学研究会」を組織した。対英米開戦の際には会を代表して「大東亜戦争と吾等の決意（宣言）」を執筆し、「戦争は、突如開始され、その刹那、我等は一切を領得した」とする（『竹内好全集』14巻295頁）。この間2年間北京に留学。1943年に陸軍に召集され、中国湖南省で敗戦を迎える。



戦後は魯迅の翻訳、研究や中国論を展開する一方で丸山真男らとともに進歩的知識人としても活躍した。特に1960年の日米安保条約改定の際には、国会での強行採決を受け、「民主か独裁か」を提起し、反対運動の高揚に大

きく寄与した。1963年には「中国の会」を組織する。橋川もこれに加わり雑誌の編集等に携わることで竹内と親しくなる。

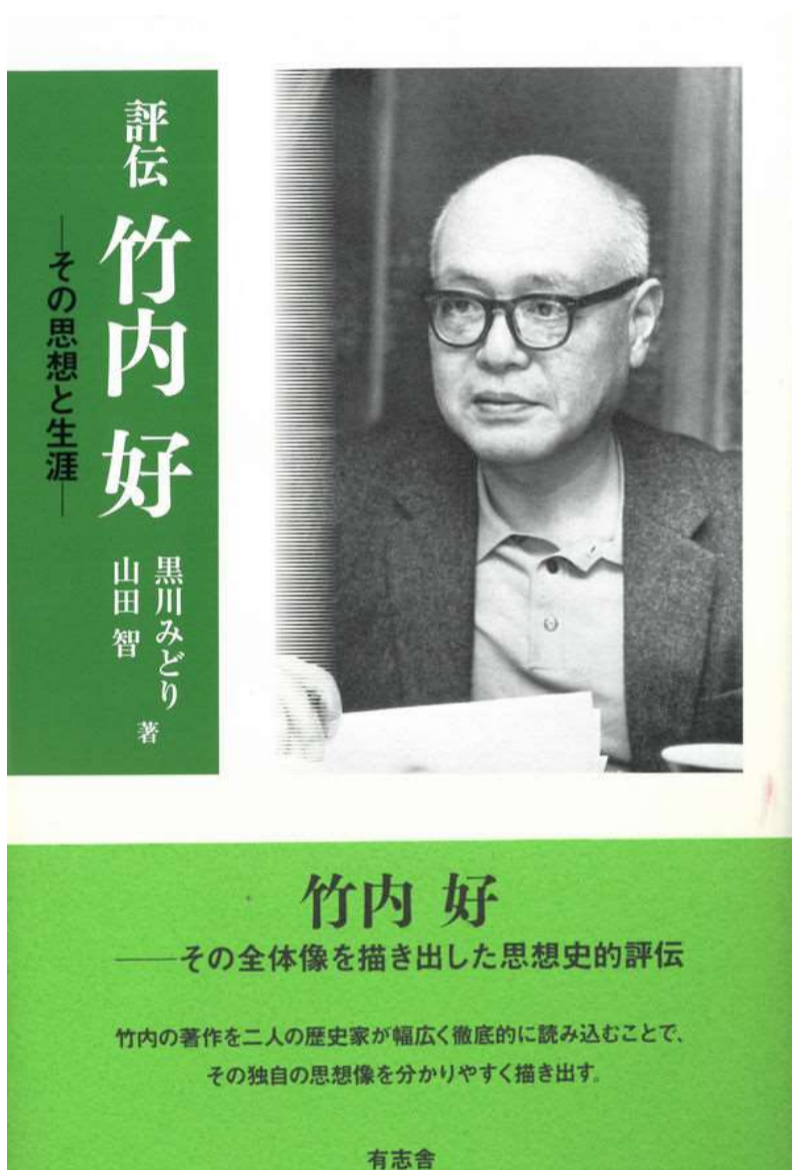


竹内さんは私にとっては中国語とスキーとの先生であり、別にお酒を呑むことと海水浴と囲碁などの遊び仲間でもあった。中国語を教わったのは鶴見和子（上智大教授）、市井三郎（成蹊大教授）、石田雄（東大教授）三氏と一緒に、その頃は代々木の「中国の会」で毎週一回の勉強であった。

『橋川文三著作集』6巻308頁

私生活面での親交に加え、橋川が思想的に「丸山ばなれ」していく上でも、吉本隆明や柳田国男と並んで、竹内が大きな影響を与えたことが、橋川論ではつとに指摘されている。その核心を一言でいえばそれは「アジア」である。

丸山が西欧近代を理念化して到達目標とする「近代主義者」であったのに対して、竹内はアジアを内在化して捉えようとした。竹内は福沢諭吉の脱亜論や文明観を検討し、その後の動向を踏まえたうえで次のようにする。



今日、アジア（アフリカを含めてもよい。）のナショナリズムとよばれているものの実体と、運動法則とは、この文明法則を虚偽化するより高い、より広い文明観への全過程を意味していると考えられる。文明の否定を通して文明の再建である。これがアジアの原理であり、この原理を把握したものがアジアである。

竹内『日本とアジア』253頁（1966年版）



4 文化防衛か体制防衛か・三島由紀夫 (1925-1970)

農商務省官僚平岡梓の子として東京に生る。本名公威(きみたけ)。いったん大蔵官僚となるもすぐに辞職し、多数の小説や戯曲を次々と発表する。日本人初のノーベル文学賞受賞者になるのでは、とまでささやかれていた。ライフワークとした豊饒の海シリーズの最終稿を渡した後、自衛隊市ヶ谷駐屯地で隊員にクーデターを呼び掛けて自刃する。



三島が1959年に発表した『鏡子の家』は、価値観を見失った青年たちを通して時代を描こうとしたもので、自信作という自任にもかかわらず、文壇での評価は冷淡だった。しかし橋川は、この作品に日本浪漫派の影を読み取り、高く評価する。後、文芸春秋社の現代日本文学館シリーズの一冊に三島作品が収められる際には、三島は身近にいた文学者ではなく、橋川を自身の評伝の執筆者に指名し、橋川はみごとにその期待に応えた。

しかし、橋川は自らの日本浪漫派を「克服」しようとしたのに対し、むしろ三島はこれを継承しようとした。その違いがあらわになったのが、1968年の『中央公論』7月号に掲載された三島の「文化防衛論」をめぐる論争である。



三島が展開した論点は多岐にわたるが、一言でいえば、日本文化の源泉を天皇に求め、その文化を守れとするものである。しかし、不用意に近代天皇制を詳述し、天皇と軍隊を栄誉の絆でつぐべしとするなど、現実政治に前のめりになっていた



三島の問題意識が強く反映されたものだった。

橋川は、9月号に「美の論理と政治の論理－三島由紀夫「文化防衛論」に寄せて」で、この点を突いた。天皇が文化の全体性を防衛するというが、既に明治憲法で侵されているではないか。軍隊と天皇が直結すれば、それは文化概念ではなく、政治概念としての天皇にすり替わってしまうのではないかと。

三島はすぐさま「橋川文三氏への公開状」として、反論を行った。

結論を先に言ってしまえば、貴兄〔※橋川〕のこの二点の設問に、私はたしかにギャフンと参ったけれども、私自身が参ったという「責任」を感じなかったことも事実なのです。なぜなら、この二点こそ、私ではなくて、天皇その御方が、不断に問われてきた論理的矛盾ではなかったでしょうか。

『文化防衛論』62頁



橋川による再反論は記されることなく終わった。が、三島の没後すらも橋川はそれを書く必要性を痛感していたという。



5 研究室の継承者・後藤総一郎（1933-2003）

長野県に生る。明治大学の学部及び大学院で橋川に学ぶ。学生運動のリーダーとして活躍するも、「運動は民衆史をないがしろにしている」と橋川から勧められた柳田国男『日本の祭』に大きな感銘を受ける。



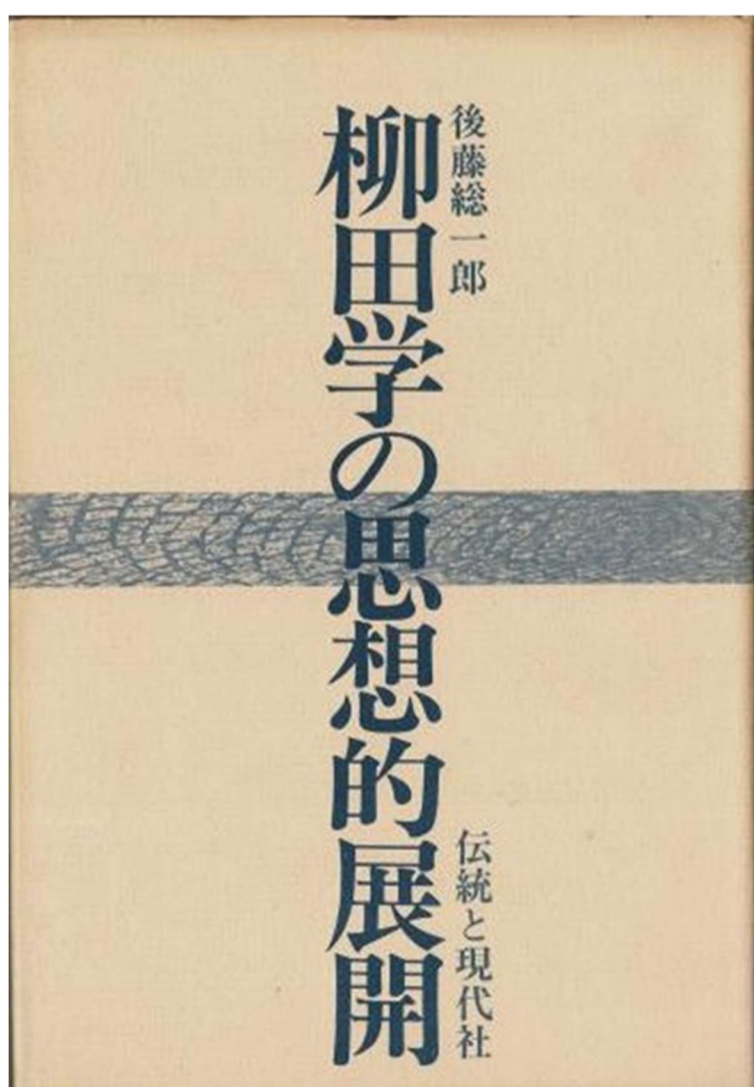
近代日本思想史上における柳田国男の学問と思想の位置について、その原初から生涯にわたる営みのトータルな思想的評価を最初に与えたのは、はじめての評伝である、橋川文三の「柳田国男－その人間と思想」であったことは、すでに今日、わたしたちの共通遺産となっている。

『新版柳田国男論序説』280頁

こう記した後藤は、橋川のこの方面の仕事を引き継ぐべく、『柳田国男研究資料集成』全22巻をまとめあげ、柳田在命中に編纂されたがゆえの瑕疵をはらんだ『定本柳田国男集』にかわる『柳田国男全集』の編纂に着手した。

その一方で橋川急逝後は、政治思想史研究室を継承した。さらには郷里の伊那谷遠山郷ほか全国各地に、「野の学び」の場である「常民大学」を組織している。それは、後藤にとって柳田の実践の継承にほかならなかった。

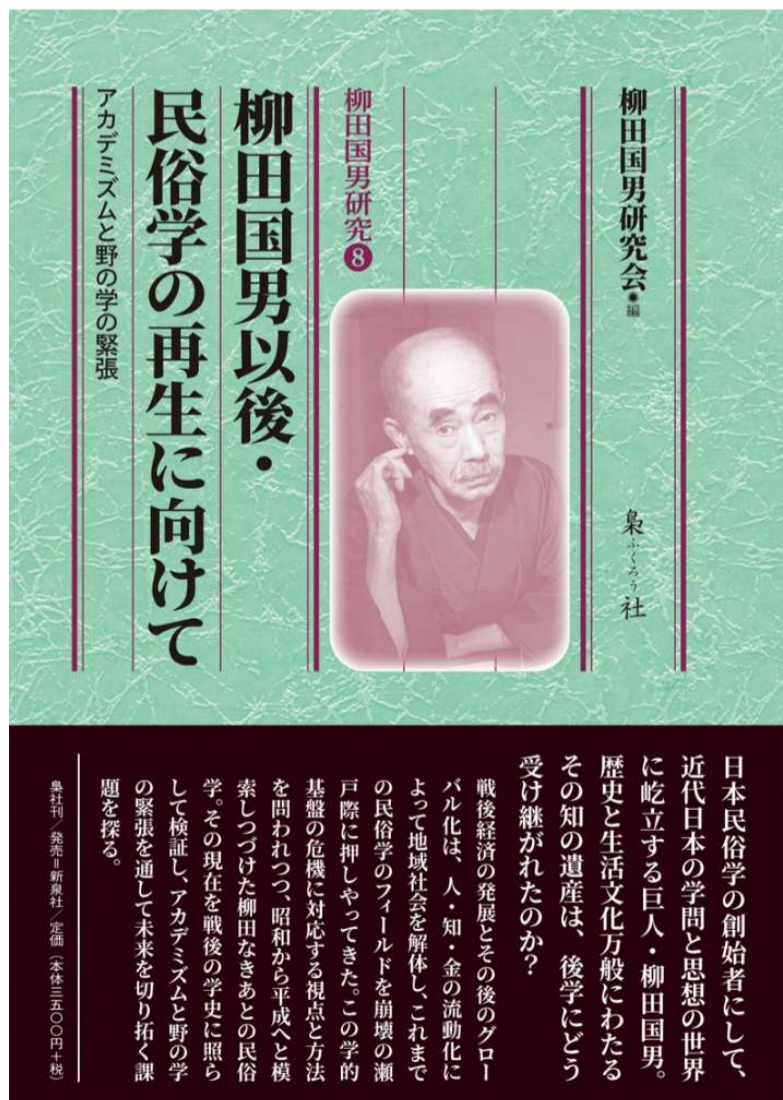
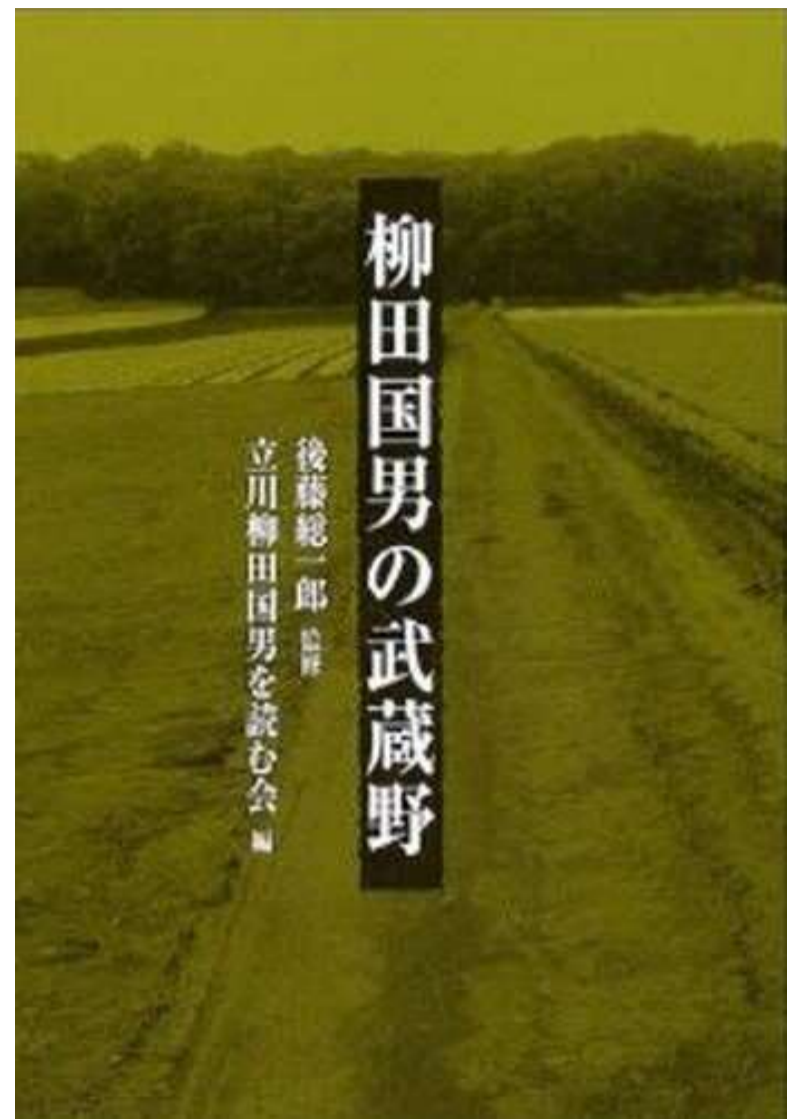
そしてそこで教えられたのが、柳田国男のひとつの理念でもあり、悲願でもあった、「郷土研究」を通してのムラづくりというテーゼであ



ったのです。すなわち、“村人が村の歴史を知り、反省すること”という昭和十年に書かれた『郷土生活の研究法』での提言を、なんとか実践し実らせてみたいものだというのが、この十年わたしが試みてきた一連のいわゆる「ムラの学問」であったわけです。

『郷土研究の思想と方法』 205 頁

また、後藤は伊那谷の中心都市である飯田市に、柳田國男記念伊那民俗学研究所を設立している。後藤が亡くなった後も、「柳田国男研究会」「伊那近代思想史研究会」「民俗調査部会」の3部会を組織して活発な活動を継続している。



6 パトリ（原郷）からの再構築を めざして・松本健一（1946-2014）

群馬に生る。接收された米軍基地（旧中島飛行機工場）を擁する太田で育った心象風景は、自伝的要素を織り込んだ小説『エンジェル・ヘアー』や『戦後世代の風景』に収められたエッセイ等で吐露されている。大学卒業後いったん企業に就職するがすぐに退職して、法政大学大学院で日本近代文学を学ぶ傍ら橋川に私淑する。在学中の1971年『若き北一輝』でデビューし、論考を次々に発表していった。

橋川との関係においては、特に北や大川周明といった超国家主義者の評伝を展開していった。歴史に関する著作も多いが、書名などにおいては、史実よりも「伝説」「物語」という語を好み、思想史よりも精神史という語を好んだ。文体も初期のものを中心に、きわめてパセティックである。

橋川と同じく戦中派で、1975年に自刃した村上一郎とあわせて天誅組に参加した伴林光平を扱った論考は次のように始められている。

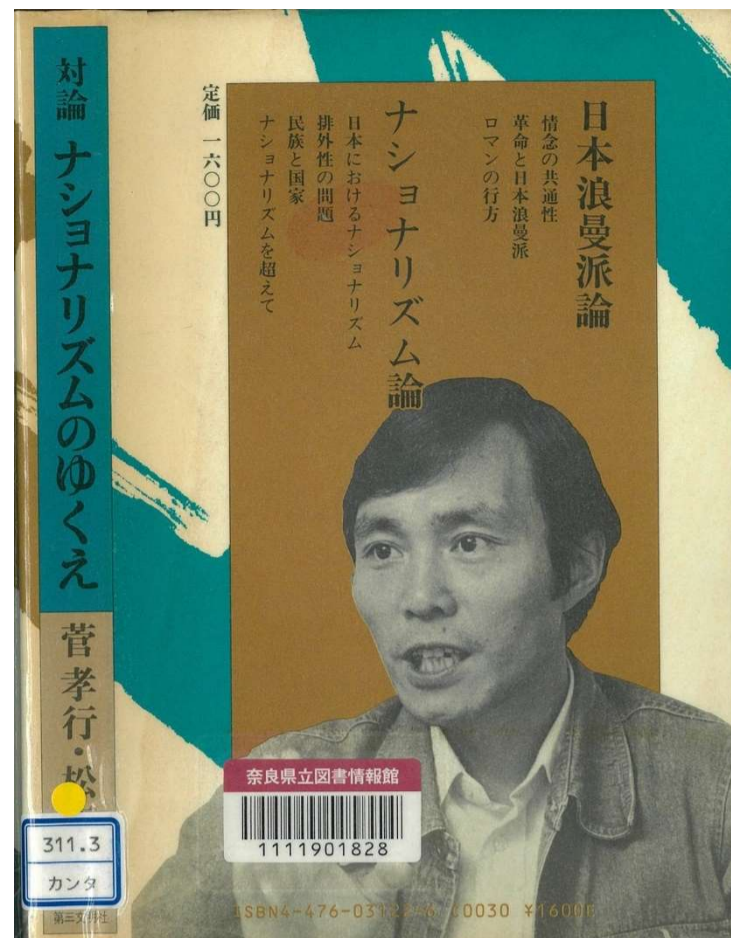


ひとは、生きねばならぬ。これは、戦後の神話である。神話は破られねばならぬ、とはわたしもいわぬ。ただ、それが神話であることを知ればよいのである

『思想としての右翼』303頁

（1976年版、2000年版には未収録）

幕末の会津藩家老を扱った『秋月悌次郎』をきっかけに、「保守的な現実主義者への関心」が



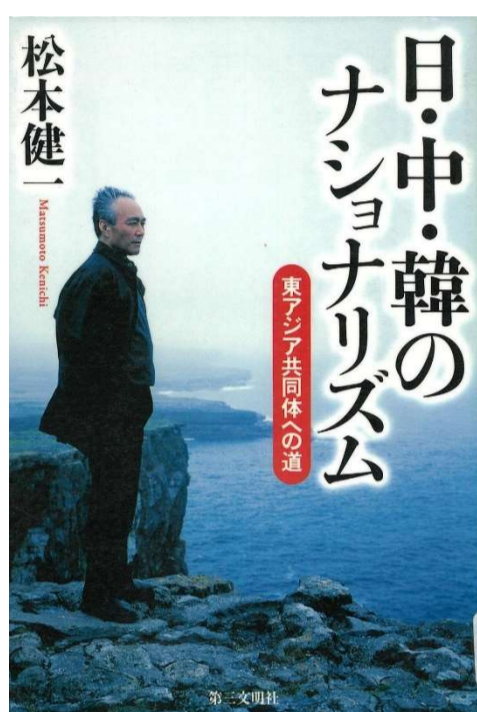


高まり（『思想の覚醒』6頁）、文明論や通史へも幅を広げていく。このころベルリンの壁崩壊や昭和天皇の死といった出来事があいつぎ、これらに触れた言説も多い。昭和という時代については次のように総括している。

昭和という時代ほど天皇の名がしばしば唱えられたことは、かつてなかった。それはときに強く、ときに低く、ときに民族の悲鳴のように、口にされた。天皇の名はあたかも、昭和という時代の持続低音だった。

たとえば、二・二六の青年将校は革命をイメージして「大御心にまつ」といい、戦争中の特攻隊員は母を想い浮かべながら「天皇陛下万歳！」と泣いて死に、水俣病の患者は議会からも裁判所からも病院からも見放されて「てん、のう、へい、か、ばんざい」と絶叫したのだった。

『昭和最後の日々』 252 頁



同書 189 頁によれば、竹内好にスキーを教わったという。この点は橋川も同じであるが、手取り足取り松本を指導する竹内を見て、橋川は「僕の時はそんなに親切ではなかった」とぶぜんとしていたという。

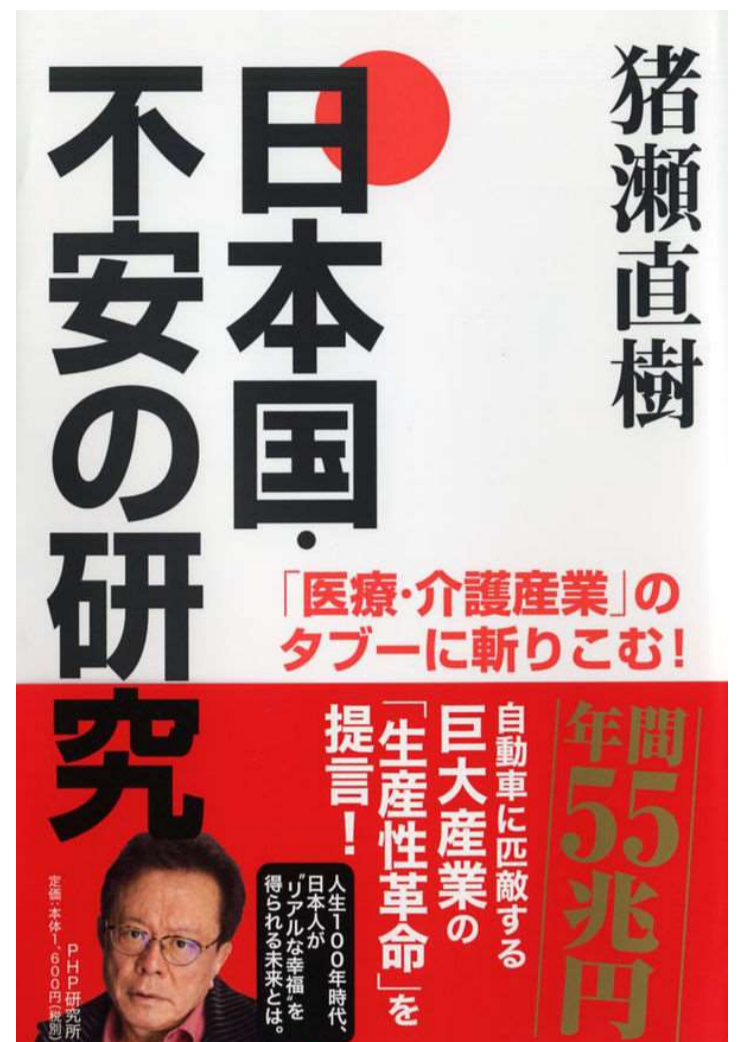
後期の著作では、郷里や原郷を意味する「パトリ」に対する言及が多く、近代の国民国家による文明をのりこえていく「かぎ」がここにあるとした。



7 ゼミ生中の出世頭?・猪瀬直樹 (1946-)

長野県に生る。信州大学卒業後、1972年明治大学大学院に進学し橋川に師事する。後には政治実践の世界に入り、東京都知事や参議院議員を歴任するが、特に初期の作品には、橋川の問題意識を継承して天皇制や昭和の戦争の問題を扱ったものが多い。デビュー作である『天皇の影法師』は歴代天皇の棺を担ぐ比叡山の八瀬童子を扱い、『昭和16年夏の敗戦』は総力戦研究所を扱った。

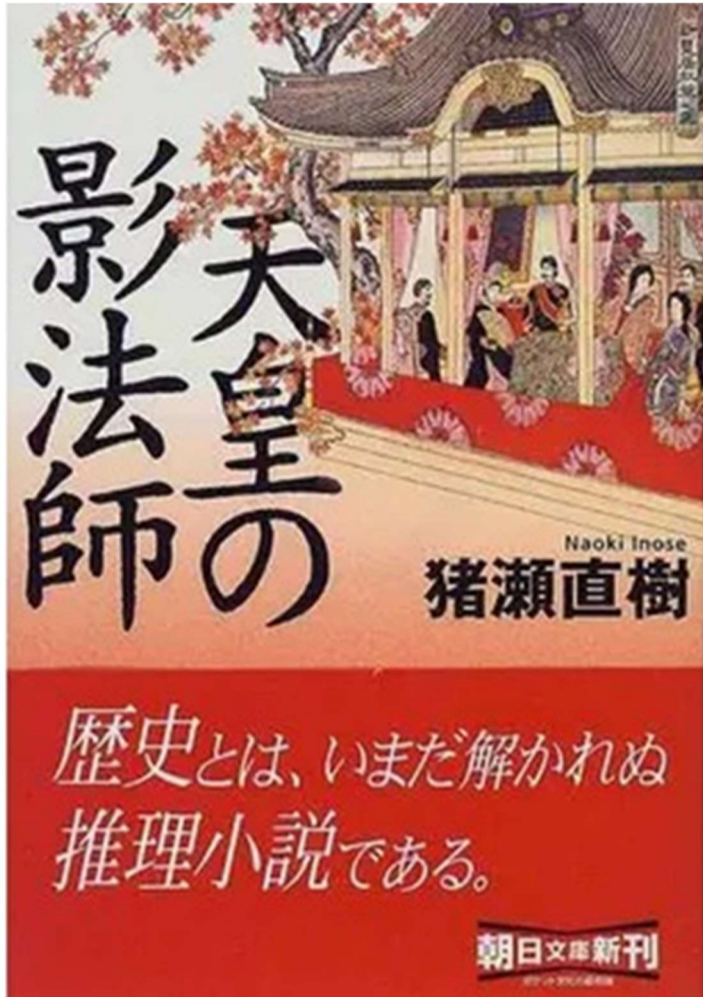
『橋川文三：社会の矛盾を撃つ思想いま日本を考える』には、デビュー作を晩年の橋川のもとに届けた思い出を収めた文章が再録されおり、橋川と出会わなかったら書かなかったであろうという『ミカドの肖像』には、次のような一節がある。



西武と天皇家が結びついたのは、皇太子明仁が「千ヶ滝プリンスホテル」を常宿としたからであった。

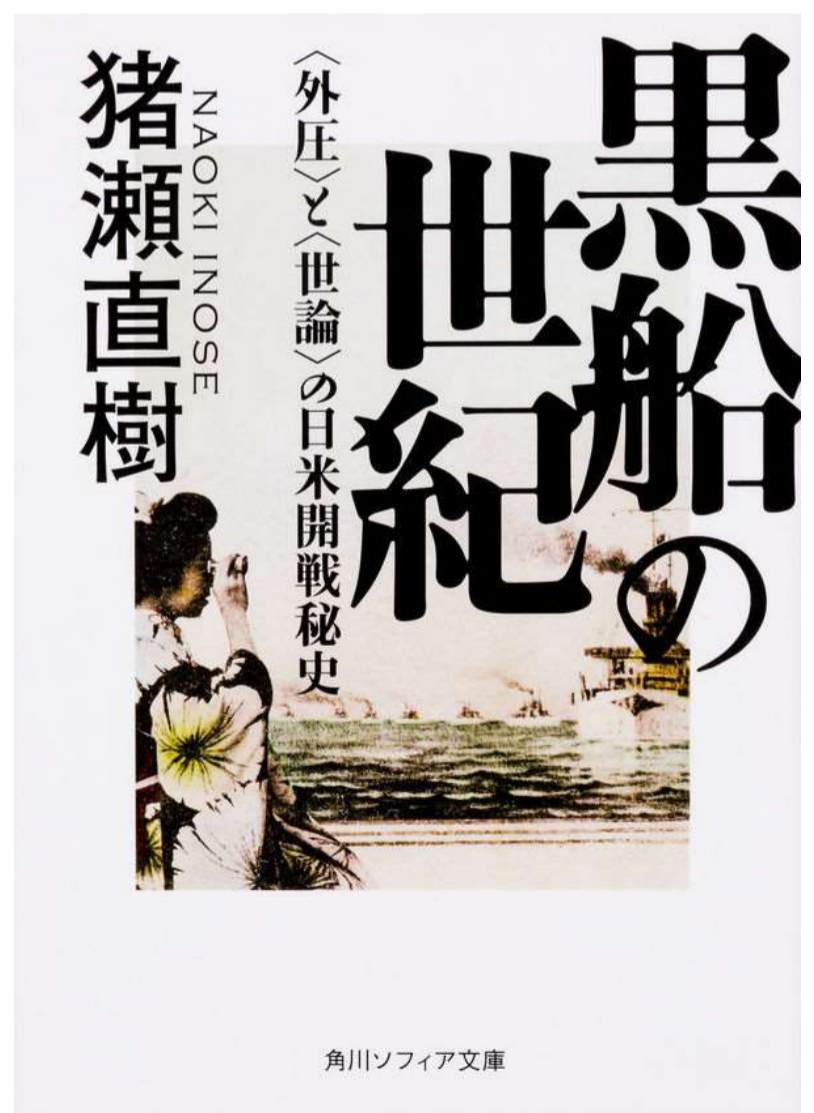
すでに明らかにしてきたが、「千ヶ滝プリンスホテル」は、もと朝香宮家の別荘であった。その別荘を堤康次郎が入手したのは昭和二十二年八月十四日。それから三年後の昭和二十五年夏、十六歳の皇太子明仁が利用するようになる。皇太子の家庭教師エリザベス・G・ヴァイニング夫人の別荘が軽井沢にあったからである。

『ミカドの肖像』226頁 (1986年版)



戦後の混乱期に、零落しつつあった旧皇族から安い値段で一等地を買いあさり、次々ホテルを建設して「プリンス」と名付けた堤康次郎の姿は、「狂乱地価」が叫ばれる時代相の中で反響を呼び、大宅壮一ノンフィクション賞を受賞するなど高い評価を得た。

この問題意識は続編の『土地の神話』につながっていく。



8 没後門人・中島岳志 (1975-)

大阪に生る。大阪外国語大学でヒンディー（ヒンズー）語を専攻し、大川周明への関心から松本健一、竹内好、橋川らの著作に親しむようになる。特に橋川との出会いは次のように描かれている。

私は二〇歳の時に橋川文三の文章と出会った。その出会いは、まさに衝撃だった。その後の人生を変えてしまったと言っても過言ではない。橋川の文体は私の精神を突き刺した。

なぜか。

それは、橋川の批評が彼自身に向けられていたからだ。

中島「解説 橋川文三と内在的批評」

『橋川文三セレクション』555頁



橋川が亡くなってから、既に10年を経過した頃だった。さらに10年が経過して、京都大学大学院にヒンズーナショナリズムに関する博士論文を提出した中島は、あとがきで「私の二〇代は、この本を書くためにあった」という、『中村屋のボース』で広く注目を浴びることになる。なお、ここでいう中村屋とはスーパーではなく、東京新宿のカレー屋のことであり、このカレーこそは独立運動でインドを逃れたボースが持ち込んだものだった。

中島には、『アジア主義』や『血盟



団事件』といった橋川と共通する素材を取り上げた著書がある一方で、ほぼ自らと似た世代の人物が起こした事件を取り上げた『秋葉原事件：加藤智大の軌跡』もある。さらには近年には政治評論から「利他」といった概念を取り上げたものまで健筆をふるい続けている。

